

◀ S · E · L · D · A · A ▶ No.38

平成16年 5月 7日発行

上智大学英語学科同窓会
東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学英語学科事務室気付

Sophia English Language Department Alumni Association

「大使による講演会」について

9ページにありますように、SELDAAセミナーに代わって、「大使による講演会」を英語学科との共催で開催することになりました。

第1回の講演会を、以下の通り開催いたします。皆様のご参加をお待ちしております。

日時：2004年5月17日(月) 18:00～19:30

場所：上智大学 L-812室 (中央図書館8階)

講師：駐日アイスランド共和国特命全権大使 インギムンドル・シグフースソン氏

講演内容：アイスランドの概要、エネルギー問題について、など

会費・参加資格等：どなたでも無料で参加できます

問い合わせ：英語学科 東郷公徳 (電話：03-3238-3719)

第2回は6月に、第3回を7月にそれぞれ開催する予定です。詳細については、決まり次第SELDAAのホームページ(3ページ参照)でお知らせいたします。ご期待ください。

SELDAA 常任委員大募集中

この同窓会の常任委員として手伝ってくださる方を募集しております。ボランティアで私達と一緒に同窓会を盛り上げてくださる方、ご連絡をお待ちしています。

上記に関するご応募・お問い合わせは、お気軽に info@seldaa.net までどうぞ。

☆☆オール・ソフィアンズ・デーで会いましょう☆☆
2004年度 SELDAA 総会&懇親会のお知らせ

2004年度総会を今年もオール・ソフィアンズ・デーに合わせて、5月30日(日)に開催します。

総会では、活動報告、議案の承認の他、SELDAAの今後の活動について、多くの方のご意見を伺いたいと思います。

総会終了後には、ささやかながら親睦パーティーを予定しております。会費は無料。是非皆様お誘い合わせの上お越しください。久しぶりの母校で、楽しいひとときを過ごしましょう。

2004年度 SELDAA 総会および懇親会

日時：2004年5月30日(日) 12:00～14:00

場所：上智会館3階 第1会議室

SELDAAホームページが新しくなりました。

<http://seldaa.net/>

詳しくは、3ページをご覧ください。



Lost in Translation

英語学科専任講師 John Williams

For the last couple of years I've been teaching a Translation class to third and fourth year students at Sophia. When the Department Chair first asked me to teach the class I was a bit reluctant at first. I had very negative memories of my own translation classes in University, where we simply plowed through passages from Proust and Balzac in a mechanical and boring fashion that put me off Proust and Balzac for years. I also wondered whether my Japanese was good enough to actually "teach" translation. In fact, though the class turned out to be a pleasant surprise in many ways and now it is the class that I look forward most to every week, because I know that I will learn something too and that the whole class will be convulsed with laughter at least once during the lesson by some bizarre mishap of language that results in unexpected hilarity.

The aims of the class are very simple: we don't really set out to translate a given text. Rather we set out to explore the implications and connotations of the words on both sides of the river of the world that flows between the two seemingly solid banks of language on either side. The more we explore the more we feel the ground slipping under our feet and the more we feel the ground slipping away, the more we want to jump to the other side and reach a solid conclusion, but often that solid conclusion just isn't there. Words melt into air and we find ourselves wrestling with the slippery eels in the river of the world.

I'm probably not making myself very clear, but I'm trying to describe the rather delirious process that sets in when students free themselves from dictionaries and certainties and begin to freely slide around in their own language and in English, as if it was a big muddy playground where they can have a lot of fun. I tell the students that I am not really interested in seeing any kind of finished product. What I want them to do is learn to be conscious of the process of translation, learn to love the slipperiness of words and the groping, the blundering, the sudden leaps of mind and flashes of inspiration as they translate. This is not a class where we set off to arrive, but a class where we set off to get lost. There are a few baffled faces at first, but after a few weeks there are also a lot of dawning smiles when the students really begin to play with words. Is this Education? I don't know. The Greek poet C.P. Cavafy thought so. He wrote:

When you set out for Ithaka
pray that your road's a long one,
full of adventure, full of discovery.

Keep Ithaka always in mind.
Arriving there is what you're destined for.
But don't hurry the journey at all.
Better if it goes on for years,
so you're old by the time you reach the island
wealthy with all you've gained on the way,
not expecting Ithaka to make you rich...

And if you find her poor, Ithaka won't have fooled you.
Wise as you'll have become, and so experienced,
You'll have understood by then what Ithaka means.

SELDAA ホームページがリニューアルされました！

SELDAA 常任委員 根本 竜太郎 (平成15年卒)

皆様始めまして。このたび新しく常任委員となりました平成15年卒の根本です。

よろしくお願いたします。

早速ですが、今回常任委員会と有志の手によりSELDAAホームページがリニューアルされましたのでご報告いたします。

<http://seldaa.net/>

皆様がこの会報を手にとられているころには、お手元のパソコンからアクセスができるようになってい

るはずですが、過去のSELDAAホームページは、どちらかというSELDAAの運営の報告をするという目的のもとに作成されたものでしたが、新しいSELDAAホームページは同窓生の動向や今の英語学科の様子などを閲覧できるようにし、よりコミュニケーションを重視したものに变化しました。取り扱うコンテンツとしては、つい最近最終回を迎えたSELDAAセミナーに代わるものとしての「大使講座」のお知らせや、読者がインターネット経由で投稿可能な「卒業生近況」や「クラス会報告」など、また卒業生のための「求人情報」などがあります。事務局では皆様のご意見を参考にしながら、英語学科卒業生が世の中に様々な情報を発信できる窓口へと、このページを今後も進化させてゆきたいと考えています。今後もコンテンツに対しては追加・変更・改善を実施してゆきます。

「知らないなんてもったいない」が新しいSELDAAホームページのキーワードです。「外英の一学生」から「社会の一個人」になった会員の皆様にとっては、懐かしい同窓生の様子を知るための一手段となるでしょうし、このウェブサイトから多くの卒業生がお互いに繋がりがあうことができるものと信じています。皆様のアクセスとご感想をお待ちしております。

なお新ホームページのデザイン監修は平成13年卒のウェブデザイナー坂巻玲奈さんをお願いしました。



『タイとの三十余年の関り合い - 英語屋の薬屋 -』



太田 逸夫 (昭和37年卒)

私がタイとの関わりを持ったのは、三十余年の過去に遡る。医薬品の販売を生業として、その拡販の為、西も東も分からぬ未知の土地へ降り立ち、戸惑った時の事が、今や大変懐かしいこととして思い出される。あの頃は、日本全体が国を挙げて外貨稼ぎに向け、輸出振興を採っていた時代で、医薬品業界もその例外ではなかった。私もその任の一端を担う者としてのいささかの自負を感じ乍ら仕事をしていた。

我が社が扱った物は、医薬品の中でも極めて普遍的に必要とされる抗生物質で、現在もさること乍ら、当時に於いては尚の事、未開発の環境の中に在ったタイを含む東南アジア諸国では、感染症治療薬として、必要不可欠の薬品として歓迎された。勿論、全てが順調に経過した訳ではなく寧ろ実際には、苦節十年とでも云うべき艱難の時期を経て、兎角、其後において、会社は抗生物質の原料から完成品に至る、一貫生産及び販売の為の現地合併会社を、BOI(投資奨励委員会)のライセンスを得て設

立するに至り、私は益々、抜けられない重責を背負わされる事となる。二十年前の事である。

爾来、私のタイでの駐在員生活は、会社設立から基礎作りとも云うべき時期の約十年(1979～1988年)と、更に、会社生活最後のご奉公としての五年(1994～1999年)の二度に亘る永い現地生活を強いられる運命となり、愈々、タイとの絆を深くした。

このような経歴の中で、当然の事乍ら否応なくタイ国の医薬業界、更に行政機関である厚生省関係にも人脈を得、亦、終盤の時期のタイに於ける外資系医薬品会社の集まりであるPPA (Pharmaceutical Product Association)の理事としての二年間の務めは、こうした私のタイの医薬品業界との関わりを一層深いものとした。

四年前、本体の会社を目度く勤め上げた後、現地子会社での二十数年来の部下であり、友人でもあったタイ人薬剤師グループとの薬品会社設立に参画し現在に至っている。お蔭で発足以来業績は順調である。

これまで述べてきた様な仕事を通じたタイとの関わり合い、そしてそれに伴う永年に亘るタイでの生活の中で、タイに於けるソフィア会(バンコクソフィア会)にも深い関わりを持つ結果となった。

二十余年前私が現地生活をスタートさせた頃のソフィア会は、既に存在していたが、まだ十名足らずの会で、年に数回の集まりが不定期に召集され、あの頃まだ混沌としていたタイの社会に就き、経験的情報を持ち寄っては皆でお互いの外地生活を労り合っていた。

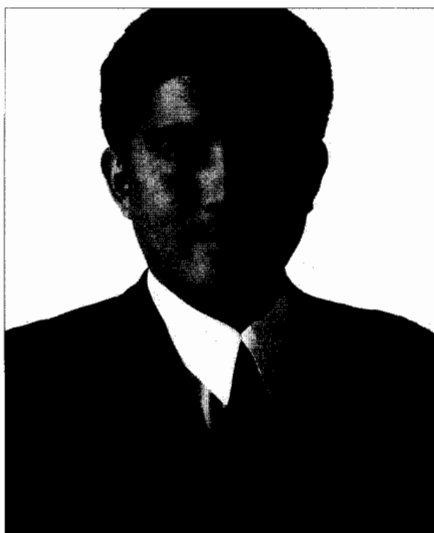
其後、世の中の変化発展に伴いタイも急速に発展を遂げ、ソフィアズのメンバーも急速に然も年令の若返りを伴って増えていった。私もこのバンコクソフィア会の会長職を、途中不在期間のブランクはあるものの、現在に至る迄足掛け十五年近く務める結果となり、及ばず乍ら会の発展に尽力してきました。

バンコクソフィア会のかかる永い歴史と、不尚私の長期の会長職が務まったのも、吾がバンコクソフィアズの中に在った、旧くより現地に土着して、志す事業を立ち上げ成功させているベンチャー精神旺盛な人物数人の存在が大きな支えとなったことを敢えて特記しておきます。中浦安邦(36年経)、福田千城(43年法)そして吾が外英40年卒の齊藤芳隣各氏の面々であります。彼等の益々の成功を祈ってやみません。

在学中決して勤勉な学生ではなく、山岳部に籍を置いて一年の半分近くを山に費やしてきた所謂劣等生だった私が、上智の英語学科卒という看板を掲げるにはいささかおこがましいと常々思ってきた事だが、結局はこれを生業の武器としてサラリーマン生活を全うした事、そして英語屋が何故薬屋なのかという不思議な因縁。然し、これも人生の綾ということでしょうか。

『現在、イスパニア語を勉強中！』

平井 卓也 (昭和55年卒)



昭和55年に英語学科を卒業し、広告会社に就職した。在職中はアメリカをはじめ英語圏でのプロジェクトに携わる機会が多かった。7年弱のサラリーマン生活を経て、郷里でテレビ局の経営に参画後も、概ね英語だけで事足りた。

ところが現在、私はイスパニア語を勉強している。最初は、仕事で赴いたスペインの雰囲気妙に肌に合い、爾来、訪問を重ねることになった。殊に、スペイン現代美術の圧倒的な魅力に憑かれ、ついには地元香川県に、若手スペイン人芸術家の作品のみを収集展示した「丸亀平井美術館」を設立するに至った。私にとって、スペイン現代美術の研究は趣味の域を越えたライフワークとなり、スペインは第二の故郷となった。この美術館プロジェクト設立過程で出会ったキュレーター、学者、建築家、芸術家の中には自在に英語を操る人も多かったので、さほど不自由は感じなかった。しかし、スペイン文化の真髄に触れようと思ったら、イスパニア語習得は必至だ。歴史的な背景、英語より豊富な語彙を深く理解しなければ本当にスペインを理解したとは言えない。

平成12年の衆院総選挙で初当選し、現在二期目の議席を預かっているが、スペイン美術館長という風変わりな来歴から「日本・スペイン友好議員連盟」の事務局長に任命され、各種シンポジウムや来日要人の応接など、スペインに絡む役目を一手に引き受けることとなった。国会議員が不如意な外国語など話すべきではないが、円滑な交流促進のため、時には母国語で話すことも有益である。イスパニア語は、ヨーロッパや中南米を中心に3億余の人々が公用語としており、母国スペインの好況もあって有為性が高まっている。これを好機と一念発起し、語学教室に通い始めた。もう一度イスパニア語学科に通いたい気持ちになるが、現実には駅前留学が関の山だ。最近、中国ブームで中国語を学ぶ人が増えていると聞くと、21世紀の世界を見渡せば、イスパニア語習得の果実がより大きいのは明白だ。英語学科卒業の私がイスパニア語を薦めるのはおかしな話だが、21世紀は間違いなくイスパニア語が優勢になる。

卒業生短信

2月上旬までに事務局に届いたお便りを掲載いたします。

(本文中では敬称を略しております。ご了承ください。)

皆様からのお便りを募集しております。ご自身の近況、自著の宣伝等、なんでも結構です。同封の葉書に書いて、同窓会事務局までお送りください。

■長年海外に在住しており、同窓会活性化委員会のメンバーです。近々思うことを記します。矢張り、現在、評判を揚げてきている大学は、実社会との結びつき/連携を前向きに実践している大学であり、それは理工系の大学に多いのですが、ある意味では、英語も技術の一つであり、SOPHIAが特色を出せるのは、欧米大学/社会との連携が他校よりも容易という点で日米欧の大学同士での連携PROJECTSを持つとか、或いは、起業をするとか、単に英語の勉強だけでなく、実業志向を強くして、或いは日本の企業とPROJECTを共有するとか、他校に無い特色を出す事が必要だと思えます。

私は在学中に選択科目で商業簿記を取りましたが、外国語学部の生徒が簿記を選択で取ったのは初めてだと言われました(それは矢張り後年企業に入った後、役に立ちました)。現在、親しくしている某水産会社のK君は同期の諸氏がドンドンリストラされている中、英語の文章を書かせたら、社内ピカイチと評判を取り、海外合併運営のPROとして、忙しい社長の代行で海外合併相手との会議に出席し、現在もバリバリの現役で余人を以て代えがたいとされています。

12月17日付の日経産業新聞に出ていましたが、早大と中大が今春開校の専門職大学院で「事業再生講座」をそれぞれ設けるが、これは経産省の肝いり、再生ビジネスの専門家不足の昨今、産業界の注目を集めているとの事です。

取り留めなく書きましたが、学校は単に教養の為の勉強ではなく、実務志向で実社会に出て、実力を発揮できる人を育てる事を主眼にした取り組みをすべきと考えます。

斉藤 芳隣 (タイ在住、昭和40年卒)

■昨年7月に双子の女の子が生まれました。長い間子供に恵まれなかったため、いっきに2人の親となり、あたふたとした毎日を送っています。この年になっての育児は予想以上にキツク、肩こり、腰痛に悩み、まさに「老体にむち打って」がんばっています。じじ、ばばの手を時々借りて、息抜きしつつ、泣いたり、笑ったり、怒ったりの子ビ達に翻弄されながら、結構楽しく暮らしています。

50クラスのみなさん、いつか同級会をしましょうね。連絡待っています。E-mail: mikolin@ta2.so-net.ne.jp

御子柴 (伊藤) 理佐 (昭和63年卒)

■金(Gold)のディーリングを始めて17年になりました。業界ではもはや長老です。Time flies...

英語学科の皆さん、St. John's、St. Ben'sの交換留学の先輩、後輩の方々、久しぶりに集みたいです。アレンジしますのでメールください。

E-mail: ikemizu@cup.com

池水 雄一 (昭和61年卒)

■早川書房より、拙訳にてボブ・カラシ『アイリッシュ・ヴァンパイア』を刊行いたしました。御高覧ください。

下楠 昌哉 (平成3年卒)

■2003年卒の大坪隼一です。在学中はパウロの名をご記憶の方も多いでしょうか。卒業後は地元群馬で塾講師を務めながら、将来は機会を待って海外で再び学びたいという夢を抱いています。先月、在学中の友達であったMさんが同じ塾に勤めるかもしれぬというニュースに、胸が躍りました。なぜか、大学の友と同じ仕事場で出会うという事はありえないことと考えていましたので、それはもう歓喜の声を心で叫びました。まだMさんが実際同じ職場に来るかはわかりませんが、そして将来どんな形でソフィアと再会するか知りませんが、そのときにはお互い励まし助け合っていきたいものです。それぞれの場でのendeavorに祝福が多々ありますように。

大坪 隼一 (平成15年卒)

活性化委員会報告書

活性化委員会委員長 片野順子 (昭和52年卒)

活性化委員会は、昨年9月より隔月に開催されています。委員会は、松尾先生をはじめとして応募していただいた10名前後の方で構成されています。石川会長と常任委員会のメンバーはオブザーバーとなっています。この委員会は、今年、同窓会設立20周年を迎えるに当たり、同窓会の活性化をはかるために設立されました。第1回の委員会で、私は以下のことを提案いたしました。

1. 同窓会ネットワークサービスの充実 (同窓会ホームページのリニューアル)
2. セミナーの充実 (大使講座の開始)
3. 「上智大学外国語学部英語学科」の本の出版

これまでの4回の委員会で、上記を中心に討議を重ねてきました。そしてまず、ホームページ (<http://seldaa.net/>) がリニューアルされました。是非ご覧になってください。委員会では、これまで、どのような内容のホームページにするかということで細かく議論を重ねてきました。それだけに、新しいホームページにかかる期待はとても大きいのです。

SELDAАセミナーは、5月からいよいよ各国の大使を招いての講座に形が変わります。当初、授業として扱うべく、東郷先生もご尽力くださったのですが、教授会での承認が得られず、しばらくは、英語学科と同窓会が協力して、講演会という形で行なうことになりました。トップバッターは、アイスランド大使です。5・6・7月と3回の講演会を開く予定です。それが成功すれば、その後は「大使講座」として続けていくことになると思います。

「上智大学外国語学部英語学科の本」については、いろんな出版社にあたりましたが、出版界も不況の中、なかなか企画を取り上げてもらえない状況です。活性化委員会は、同窓会設立20周年を迎え、本の出版にとっても興味を持っています。今後もこの件に関しては、アイデアを出していきたいと思っています。

ホームページがよりアクティブになることで、わたしたち活性化委員会も、より多くの卒業生の意見をこのホームページから聞くことができると期待しています。近い将来、活性化委員会自体の役割を、このホームページが果たしてくれることになるかもしれません。ホームページの成功こそ、上智大学英語学科を活性化させる第一歩だと信じてやみません。その日を夢見て、これからもアイデアを出していきたいと思っています。

次回の活性化委員会は5月12日(水) 18:30、ソフィアンズクラブにて開催の予定です。活性化会員以外の方の参加も歓迎します。

SELDAA セミナー

2003年度後半に行われたセミナーについて、出席された方にご報告いただきました。

これまでに開催されたセミナー

● 2003年10月22日(水)

Mrs. Dalit Bloch-Tzemach (留学生 (イスラエル))

『Young Israelis in Japan: An Inter-Cultural Encounter』

10月22日はイスラエル生まれ、育ちの文化人類学の研究者 Mrs. Dalit Bloch-Tzemach(ダリット B. ツェマ)のお話でした。

兵役(男性3年、女性2年)が義務づけられているイスラエルの若者たちは兵役終了後、海外へ旅行することが多いそうです。今回は” Dwelling tourism”として、一時的に居住して、異文化日本を体験しているイスラエルの若者たちに焦点をあてています。彼らへのinterviewを通じて調査、研究に関する興味深い内容でした。

先生ご自身もお子様たちを、日本の幼稚園、小学校へ通わせたりして、ご一家で積極的に異文化交流に取り組む姿勢が印象的でした。

—— 吉田知子 (昭和43年卒)

● 2003年11月26日(水)

國弘正雄氏 (元英語学科非常勤講師、英国エジンバラ大学特任客員教授、月刊『軍縮問題資料』誌編集人)

『近頃思う事』

國弘先生は「近頃思うこと」という演題で参加者から出されたテーマに沿って、熱のこもったお話を聞かせて下さいました。ご専門の文化人類学はもちろんのこと、同時通訳、ニュースキャスター、国会議員等々、多彩なご経歴からの様々なお話を大変興味深く伺いました。

アメリカに10余年在住され47州を飛び歩かれた先生は、知米家としても知られています。特に、キューバ危機最中のケネディ大統領の緊迫した様子、その後1963年夏のワシントン大学での同大統領の数ヶ月後の死を予見していたかのように哲学的な素晴らしい演説のことなど、歴史に残る多くの場面に実際に立ち合われた先生ならではの挿話でした。

一方、「小学校の英語教育」というテーマに関して、大切なものはまず「母語」の習得であるとされ、白黒のはっきりした答えより、最近ではeither-or/賛成反対 (mutually exclusive) の議論よりむしろboth-and/相互浸透的(mutually permeable) の発想の方が、つまり、西欧の論理より東アジアの論理の方がしっくりくるのだ、とおっしゃった言葉が印象的でした。

—— 日岡久美子(昭和49年卒)

● 2003年12月10日(水)

東郷公德氏 (英語学科助教授、昭和62年卒)

『“リヤ王”：すべてを失った時、残るものは?』

前回は「シェイクスピアの生涯」についての講義でしたが、今回は『リア王』のお話です。昔読んだ時は物語の最後に主な登場人物がほとんど死んでしまうので、ただ悲しくて救いようがないという印象でしたが、たとえ権力や財産などすべて失っても、目に見えない大切なものが残る、それは何かということ、東郷先生はご自分の体験を交えながら、熱く語って下さいました。最後にビデオでローレンス・オリビエ主演の『リア王』の中から、印象的なシーンをいくつか見せていただき、その迫真の演技に感動しました。

—— 座間由美子(昭和43年卒)

● 2004年1月28日(水)

木村和美氏 (東京外国語大学講師、昭和49年卒)

『英語の発想で書くライティング』

寒い日が続く一月の朝、講演テーマに惹かれて、木村和美先生の講演に出かけた。講演は英語で行われ、また出席者には演習問題が課され、学生時代のような緊張感がありながら、先生のお人柄を感じる和やかな雰囲気であった。

講義は、英語圏の人々に理解してもらえる文章とその表現方法は、どのように日本語の場合と違うのか、幾つかの具体例とともに進んだ。

先生は、「日本語的な発想で文章を書きたい」と言ってくる学生達の話しを紹介した。言葉は文化の違いに起因するが、学生達が相手に自分の意志を正確に伝えたいという思いは、これからのグローバル社会を生きる我々にとっても重要なテーマであると感じた。

—— 加藤(藤本)直子(昭和58年卒)

これまでに開催されたセミナー

● 2004年2月25日(水)

作間和子氏 (東京女子大学文理学部英文文学科専任講師、
昭和61年卒)

『アメリカ女性作家が描く結婚と女性 —— Louisa May Alcott, C.P. Gilman, Edith Wharton など』

19世紀から20世紀初頭の4人のアメリカ人女性作家が、女性の結婚と自立の問題を約100年後の今に生きる私たちにも十分共感できるような的確さで描いていたことがわかり、新鮮な講演でした。『若草物語』でしか知らなかった、Louisa May Alcottが男を騙して玉の輿婚をする女性を、Kate Chopinはmother-womanいわゆる良妻賢母になりきれない女性の苦悩を、Charlotte Perkins Gilmanは実体験に基づく産後うつ病を、Edith Whartonは天職として家柄、富を得るための結婚を求めながらも敗れさっていく女性を描いていたことが、引用や時代背景と共にわかりやすく説明されました。時代、作家の性別等を絞り込んで幾つかの作品を同時に読むことで、ひとつの作品を読むだけでははっきりしないテーマが浮かび上がり、それが国や時を越えた普遍性を持つという、文学のおもしろさを改めて認識しました。

—— 池橋ワイマントみね子(昭和60年卒)

● 2004年3月10日(水)

岡田仁孝氏 (上智大学比較文化研究所長)

『企業の社会的責任と人権』

CSR(企業の社会的責任)は今や企業にとって取り組むべき緊急課題である。その理念は、企業は利潤の追求だけでなく、社会との共存発展を重視した経営をするべきだとするものだ。CSRでは、企業と何らかの利害関係を有するすべてのものを「ステークホルダー」としている。その対象は、消費者、株主、従業員のほか、取引先、地域住民、投資家、金融機関、政府、NGOなど幅広い。

そして日本企業がCSRを実際の企業経営に生かすための提案として、1999年1月スイスのダボスでアナン国連事務総長が提唱し、翌年国連本部に発足したグローバル・コンパクト(GC)に参加するのが良いと思う。GCは人権、労働基準、環境の面で、責任ある企業市民を育てようとする自主的な活動で、参加企業は1200社以上、NGOや学術研究機関も数十に及ぶ。しかし、各国別の参加企業数で見ると、フランスの200社以上に比べ、日本はキッコーマン、リコーなどの14社にすぎない。

従って、特に日本の場合、CSRの意識を企業のトップから末端まで浸透させる必要がある。

—— 佐藤誠一郎(昭和53年卒)

『SELDAASEミナー終了』と 新講演会開催のお知らせ

英語学科同窓会の発足と同時にスタートした『SELDAASEミナー(旧女性セミナー)』は、3月10日の講演を最後に一旦終了することになりました。長らくご支援いただきありがとうございました。

今後は、時間も内容も刷新し、英語学科との共催による各国駐日大使による講演会に衣替えします(7ページ参照)。対象は、英語学科の現役学生と卒業生はもちろん、他学部、学内外の方々にも開放するものです。第一回講演会の詳細は次の通りです。

日時：2004年5月17日(月) 18:00～19:30

場所：上智大学 L-812室(中央図書館8階)

講師：駐日アイスランド共和国特命全権大使
インギムンドル・シグフスソン氏

講演内容：アイスランドの概要、

エネルギー問題について、など

会費・参加資格等：どなたでも無料で参加できます

問い合わせ：英語学科 東郷公德

(電話：03-3238-3719)

第二回目の講演は、6月に駐日バングラディッシュ大使にお願いすることが決定しています。詳細は、SELDAASEのホームページ(<http://seldaa.net/>)で発表します。7月にも開催されます。その後については、前期に開催される5～7月の3回の講演の結果を見て検討することになります。

英語学科同窓会としては、各国大使による講演会上智大学英語学科ならではの特色ある事業として成功させたいと願っています。そのためには、皆様のご協力が不可欠です。是非、広く呼びかけていただき多数の方がご参加くださることを期待しております。

SELDAAセミナー(旧女性セミナー)の終了にあたって、これまで世話人で活躍された方々に寄稿していただきました。

「女性セミナーを振り返って」

鈴木 禮子 (昭和41年卒) 吉田 知子 (昭和43年卒)

女性セミナーは、後にSELDAAセミナーの名称に変わりましたが、3月10日を以て幕を閉じることになりました。1984年にSELDAAの発足と同時に活動の一環として女性セミナーを計画し、その年の11月より月1回、主として英語でのレクチャーを聴く集まりを25名でスタートいたしました。生の言葉に触れて、錆び付いた英語をブラッシュアップする機会をもとうというねらいで始めましたが、このことは更に、家事や子育てに偏りがちな主婦の目を外に向けるチャンスにもなりました。

学生時代に教えていただいた先生方を講師に、殊にFr.ニッセル、Fr.ミルワードのお二人には、始めるにあたり連続してお願いし、快く引き受けていただきました。短編小説を読み、スクリプトを読みながらビデオを見、或いは国内外の問題についてその国の講師によるタイムリーな解説を聞き、或いは実用的な言葉の使い方を学ぶということも加え、多岐にわたるプログラムを楽しんでまいりました。学外からも多くの講師の先生方に来ていただくことも度々試みました。十数名の参加しかない時期も何とか乗り越え、今日に至りましたが、年々時代のニーズも変化し、仕事をもつ女性が増えたことで、求めるものも変わってきたことも事実です。

10周年記念の会を最後に若い年代の方へバトンタッチ、S.49年卒の日岡さん、三好さん、渡辺さんに5年間、その後S.46年卒の熊野さん、森本さん、落合さんへと引き継がれ、今日まで世話人をお願いいたしました。

メンバーの年代は10年以上の開きがあり、出身も英語学科以外、また外部の友人を誘ったりと拡がりましたが、ほとんどは上智出身で共通するものを持ち、興味の対象は必ずしも同じではないにしる、英語を学び続けたい、知識だけではなく、私共がテーマにしてきた、どんな話題からも生きる知恵を見つけ身に付けようということを、各々が持ち続けてきたように思います。年月を経ていくうちに、学年の枠をはずした人と人とのつながりができたことは、この会を通じて得ることができた大きな収穫だと思えます。

これまで足掛け20年継続できましたことは、なんとと言ってもS.J.ハウス内と、上智に関係のある様々な国籍の講師陣、そして会員の皆様の暖かいご協力があってこそと感謝いたします。

「SELDAAセミナーの思い出」

熊野 順子 (昭和46年卒)

1年前の会報誌にセミナーの次期世話人募集の文を載せて頂きました。それなのに力及ばず出席者の激減等により、この3月10日をもって20年もの長い歴史にピリオドをうちました。

今はとても寂しいのですが、一度もいらした事のない方々に一体どんな会だったのか、簡単にご紹介いたします。

「講師派遣依頼書」の中の講演会の主旨には：毎月1回、学内外を問わず、多方面から講師の方々を御招きし、各々の専門分野についてあるいは、その時々トピックスについてわかりやすくご講演いただく場を同窓生に提供しています。とあります。

この主旨のとおり、毎回素晴らしい先生方をお招きすることができました。

鈴木先輩とはあらゆる意味で比べものにならない私達がどうにか世話人の役目を果たせたのは、

- ①電子メールの助け(講師依頼の強力な道具)
- ②英語学科OBに対する講師の方々の高い評価と信頼
- ③この小さな「学びの場」をこよなく愛する私達世話人(落合、森本、熊野)をいつも、覚えて応援してくれていた46クラスメート達

本当に、たくさんの方達のおかげで充実した時を過ごす事ができました。

どの先生方も、周到な準備とあふれる情熱を傾けて、教えて下さいました。その真摯な態度に圧倒されることもしばしばでした。

数多くの名講義の中でも、カリー学長がピアノの弾き語りでミュージカルナンバーを聴かせてくださった時は本当に至福のひとつでした。

ペマ・ギャルボ氏が時間ぎりぎりまで「Animal Farm」の本に目を通し、赤線を引いていらして「この会は質が高いので、準備しすぎることはないのです」と言っていた事を思い出します。勿論、鈴木さんが世話人でいらした時なのですが、いつもの様に、彼女が鋭い質問をしてその講義をきりりと締めて下さった事を未だに覚えています。

最後に去年4月のニッセル先生の時のことを。講義の半年前をお願いに上がった時は、病後で、御元気がなく、実はちょっと心配でした。ところが、実際、その時が来ると、きちっと計算し尽くした講義を展開して、世話人達をびっくりさせました。またまた教育者としての素晴らしさをお示しく下さいました。

私達は中年になっても、学ぶことのできる場所を豊かに備えて下さった英語学科会と先生方に心の底から感謝しています。教養の本質と向き合う一知を愛す。まさに上智だからできた事だと思っています。本当に有難うございました。

安西 徳子 (昭和49年卒)

1984年以来20年にわたって続いてきたSELDAAセミナー(旧女性セミナー)がこのほどひとまず幕を下ろしました。セミナー創設時から長い間関わり軌道にのせて下さったのは鈴木禮子さん(S41年卒)と吉田知子さん(S43年卒)でした。1995年4月からはS49年卒の日岡久美子さん、三好比呂子さん、渡辺まかやさんが、そして2001年4月からはS46年卒の熊野順子さん、森本佳子さん、落合彰子さんが世話人を引き受けて下さいました。世話人の方々は、お役目の間欠かきず出席し、毎回様々な分野からすばらしい講師を連れてきて下さいました。毎月の講師探し、依頼、スケジュールの調整、また会計などご苦労も多かったことと思います。心よりお礼申し上げます。

この方々の、そして多くの会員の皆様のボランティアでのご協力なくしてはセミナーの継続はあり得ませんでした。小さな会ではありましたが、毎回知的好奇心を刺激されたこの集いが20年もの長きにわたって会員の皆様のボランティアのみによって運営されてきたことを、英語学科の同窓生として誇りに思います。

本当にありがとうございました。

■異動通知にご協力ください

ご住所、勤務先などに変更があった方、名簿の誤りを訂正される方、お名前の正しい読み方を知らせてくださる方は、英語学科同窓会事務局またはソフィア会事務局までお知らせください(英語学科同窓会事務局にお知らせいただいた場合、ソフィア会事務局にも通知しております)。

住所不明の方が多数いらっしゃいます。消息をご存知の方、情報をお寄せください。お友達で会報が届いていないという方がいらっしゃいましたら、是非事務局までご一報ください。

また、最近各市町村合併などによる住所の変更が多くなっております。是非最新の住所、電話番号等をお知らせください。

住所・勤務先の変更等は、同封の葉書をお使いいただくか、SELDAのホームページの「住所・勤務先変更フォーム」(http://seldaa.net/about/change_form.html)から送ってください。

■SELDAより、募集とお知らせ

◆SELDAでは、皆様よりこの会報に載せる記事を募集しています。近況や最近感じたことなど、何でも結構です。書式は自由ですので、同窓会事務局宛にどしどしお送りください(写真も大歓迎)。

◆この同窓会の常任委員として手伝ってくださる方を募集しております。ボランティアで私達と一緒に会を盛り上げてくださる方、ご連絡をお待ちしています。

上記に関するご応募・お問い合わせはこちらまで。

連絡先: 〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学英語学科事務室気付 上智大学英語学科同窓会事務局

FAX.03-3238-3910 E-mail:info@seldaa.net

(Faxは、英語学科同窓会宛を明記してください。)

■会費納入のお知らせ

本会の諸活動は、卒業生の皆様からの会費の納入によって賄われています。同窓会活動のより一層の充実と活性化を図るために、ぜひ会費をお支払い下さいますようお願い申し上げます。

会費の支払方法には、毎年会費を支払う「一般会員」と、一括払いの「終身会員」の2通りがあります。初めて会費をお支払いになる際には入会金も合わせてお支払い願います。金額は下記の通りです。同封の振替用紙にて最寄りの郵便局または銀行よりお支払いください。その際、ソフィア会会員番号を必ずご記入ください。(なお、振込用紙は、発送の都合上すべての方に送っておりますので、ご了承ください。)

入会金	: 1,000円
一般会員	: 年会費 2,000円 (できれば3年分まとめて)
終身会員	: 一括払い 20,000円

■あなたの会費納入状況

封筒の宛名ラベルの右上に「未」のスタンプが押してあるのは、今年度の会費が未納になっていることを示します。

なお、終身会員を表わす「S」のスタンプは、2003年度後半より廃止しました。

6,000人を超える同窓会会員の会費納入状況のチェックには多大な手間と時間がかかります。チェックの時期と納入の時期が重なったなどのために行き違いがあった場合は何卒ご容赦ください。

SELDA常任委員 (2004年5月現在)

- 名誉会長/丹野 眞(英語学科長)
- 会 長/石川雅弥(昭和40年卒)
- 副会長・事務局長/池沢成実(昭和48年卒)
- 副 会 長/大日方聖信(昭和62年卒)
- 会 計/内藤恭子(昭和55年卒)
- 会 報/佐藤誠一郎(昭和53年卒)
- 常任委員/蔵田 實(昭和48年卒)
安西徳子(昭和49年卒)
増田 光(昭和59年卒)
東郷公德(昭和62年卒)
根本竜太郎(平成15年卒)
- 監 査/井坂由美子(昭和47年卒)
岩村玲子(昭和49年卒)